

研究結果報告書

「経国集」対策文の研究

所属：華東師範大学 外国語学院 日本語科

役職：助教授

氏名：尤 海燕

本研究は『経国集』巻二十「対策・下」（上は散逸）に収録された二十六篇の対策文を当時の歴史・思想的文脈の中で総合的にとらえ、漢文としての表現と出典の考察、策問選定の歴史的背景、内容の隠喩性・思想性・実用性まで体系的に解き明かし、文学、歴史、思想、政治哲学という複数の知的分野にわたっての広い視野に立ち、対策という特殊な文学ジャンルを問い直すものである。

研究のため、地元の上海図書館、上海博物館などを始め、北京にある国家図書館・国家博物館、天津博物館、南京博物館をめぐり、さらに日本にいて東京大学総合図書館、南葵文庫、東洋文化研究所、同史料編纂所東洋文庫、内閣文庫、尊経閣文庫、国会図書館へ足を運び資料調査をした。日本出張の場合（2017年8月）、上述資料調査のほか、和光大学津田博幸教授を始めとした『経国集対策文注釈』の主要編纂者、執筆者5人と会談、議論し、出典の多様性や受容のパートナーなどについて貴重な助言をいただいた。そして2017年10月に南開大学（天津）で行われた「第二回東アジア日本研究者協議会 国際学術大会」で『経国集』の「時務策」研究を発表し、以下のことをまとめた。一、新羅国交問題（紀真象）と私鑄銭問題（下野虫麻呂「偽銭の駆逐法」）を通して対策文成立当時の自国の歴史、社会状況と政治情勢を探った。二、三教・二教、忠孝問題（1、下野虫麻呂「儒仏老の比較」2、白猪広成「老子と孔子の優劣」3、主金蘭「忠と孝の先後」4、大神虫麻呂「復讐と殺人」）を中心に、対策が行われた日本と唐帝国の動向との対応関係の一端を窺った。三、桓武天皇が新皇統の確立に際し、新たなイデオロギーを求めべく、漢の武帝に倣ったと考えられる四篇の対策を分析し、一連の「天地」確認の施策（統治の根拠になる暦、天地測量、封禪、制礼）をとった唐の玄宗の場合も視野に入れ、かつて同じ状況、同じ問題に直面したという中国の歴史的事実や思想的傾向に、みずから寄り添っていくように対策を行うケースを明らかにした。

以上の研究を通して、次にこの対策文全体が当時の律令国家の中でどう位置付けられたのか。「文学」としての意味は何だったのだろうか。政治、イデオロギー、思想、そして経学との関係から対策文を通時的な視点から考えていきたい。

研究成果の公表について

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

『経国集』の「時務策」研究

尤 海燕

第二回東アジア日本研究者協議会 国際学術大会

2017年10月27—29日 南開大学 (天津)

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)